

ドンマイ!!

茜川オダマキーズ

(第一話)

主な登場人物

織田真紀―オダマキーズ捕手・キャプテン

海藤知慧―前同二塁手・副キャプテン

早田里菜―前同・一塁手

桐林沙月―前同・三塁手

龍野季穂―前同・遊撃手

城内美青―前同・監督

(麓飛鳥―前同・中堅手

本村香苗―前同・左翼手

水上小夜―前同・右翼手

杉崎寿音―前同・投手

皆川悠希―前同・投手)

(カッコ内人物・成人後、冒頭場面のみ)

灘純一郎―美青の夫

花恋―美青の娘

井川譲吉―沙月の叔父、喫茶【アドラブル】店主

祥子―譲吉の妻

桐林優花―沙月の妹

海藤賢倫―知慧の兄

龍野研造―季穂の父

静海―季穂の母

真斗―季穂の弟

若本珠代―茜川高校現代文教諭

松下―茜川高校女子ソフトボール部監督

青山―茜川高校陸上部監督

○【悠蓮会館】・外景

大きな葬儀場である。

○前同・菊の間

祭壇が生まれ、法要が営まれている。読経している僧衣を来た女、知慧と、その後ろに座っている九人の、女たち、真紀、里菜、沙月、季穂、飛鳥、香苗、小夜、寿音、悠希。(全員27才)。

そして一人の男灘純一郎(32)とその隣に座る少女花恋(5)。

× × ×

長机が正方形に生まれ、法要後の会食が行われている。楽し気で和やかな雰囲気。空席の前に遺影が置かれ、その横に座っている純一郎。

純一郎「みなさん、チームのこと、娘にいろいろ聞かせてやってくれませんか。(娘を見て)お母さんの高校生の頃の事、聞きたいよな、花恋」

頷く花恋。

花恋「うん。花恋、お母さんのことなんにも知らないから、お母さんのこと、いっぱい知りたい。お話して」

花恋をじっと見つめる十人の女。うちの一人、真紀がグズグズと泣き出す。隣に座った僧衣の女、知慧がため息をついて。知慧「いくつになっても……ほんとあんた変わらないね」

真紀「うるさいよ……」

知慧「花恋ちゃん。あなたを命がけで産んだお母さんはね、わたしたちのチームの監督だったのよ。そんでね、わたしたちのチーム、オダマキーズはね、この泣き虫女の一言から始まったんだ」

真紀「大好きだったわたし、美青のこと。本当に。今でも大好きだ。ずっとなんとなく好きだ……」

知慧「そんなの、あんただけじゃないっつの」

知慧も涙ぐんでいる。誰もがうなづく。

(F・O)

○茜川高校・小運動場

(F・I)

〈テロップ、以下TⅡ2008年・春〉

女子ソフトボール部の面々が声を出して練習をしているグラウンド。その一隅に立っている顧問で監督の松下(23)。彼の前にいる一年生の織田真紀、海藤知慧、早田里菜の三人。真紀はグズグズと泣いている。

知慧「どうしても、部に残っちゃだめなんですか」

松下「マネージャーとしてならかまわん。だけど、部員としては、な」

知慧「マネージャーとしてやっていきたいわけじゃありません」

松下「——俺はな、強いチームを作りたいんだ。去年は関東大会ベスト8。俺はそれで満足しない。全国を、頂点を目指してる。練習は今からますます厳しくなる。きみたちの実力じゃけがをする恐れが大いにある。一か月練習を見てきた俺の判断だ。君たちのことを思っ言ってるんだ。分かってくれ」

里菜「わたしたち、もう上手になることはありませんか」

松下「残念ながら、な」

松下を睨む知慧。目をそらす松下。

知慧「分かりました。退部します。一か月間ご指導ありがとうございました。いきました!」

ぞんざいに頭を下げ背を向ける知慧。

里菜「わたしも退部します。ありがとうございました」

里菜も背を向ける。グラウンドを後にしようとする二人。まだグズグズと泣いている真紀。知慧、振り返って。

知慧「真紀! あんたどうすんの! マネージャーやるの!？」

真紀、俯いて。

真紀「わたしも、やめます……」

松下に会釈して背を向ける真紀。

並んで歩き始める知慧と里菜。

真紀、二人を追いかけるように小走りです。追いつく前に派手に転ぶ真紀。

ため息をつき薄く笑う松下。

松下「よおっし、集まれー」

ソフトボール部員に声をかけ、練習指導に戻る松下。

#### ○帰り道

並んで帰っている制服姿の真紀、知慧、里菜。真紀はまだベソをかいている。

知慧「ああ、鬱陶しい。ずっと泣いてればいいよ、そうやって」

真紀「だって、だってさ……悔しいよ、やっぱり。知慧は悔しくないの？」

知慧「悔しくないわけじゃないですよよ！」

真紀「すぐ怒る……」

二人を見てククツと笑う里菜。

里菜「なんか名コンビだね、二人」

知慧「やめてよ。ただの腐れ縁よ——早田さんは、なんでソフト部入りたかって思ったの？」

里菜「わたし？ わたしそんなに運動得意じゃないんだけどさ、高校の三年間くらい体動かすのも悪くないかなって思ってた。二人は中学校のときソフト部だったんだよね」

真紀「うん。二人とも補欠。試合出たこと一回もない」

知慧「うるさいよ——ね、早田さんの家ってさ、葬儀場の悠連会館だよ」

里菜「え、うん」

知慧「父や祖父がお世話になってます」

理名「え？」

知慧「うちの家、浄仙寺。真言宗の」

里菜「あ、そうなんだ」

知慧「おじいちゃん、いつも褒めてる。『すごく礼儀のしっかりしてる子が控室でお茶とお菓子出してくれるんだ』って。早田さんのことだよね？」

照れくさそうに笑う里菜。

歩いて行く三人。

#### ○商店街

アーケード下の商店街へ入って行く三人。

#### ○喫茶店【アドラーブル】前

通り過ぎようとする三人。そこへ後ろからやってくるエプロン姿でポットを持った同級生の桐林沙月。店内に入ろうとするが三人に気づき。

沙月「あれ、早田さんじゃん」

里菜「桐林さん」

沙月「部活もう終わったの？」

里菜「クビになっちゃってさ、わたしたち」

沙月「クビ？ なにそれ」

里菜「桐林さん、ここでバイトしてるの？」

沙月「ここ、わたしんち」

里菜「あ、そうだったんだ」

沙月「まあ、入りなよ」

入口をコナす沙月。

#### ○前同・店内

四人掛けテーブルを挟んで座っている真紀、知慧、里菜、沙月。

離れた奥の席で『キャプテン翼』のコミックを読んでいる同級生の龍野季穂。

沙月「そっか、そんなこと言われてクビか」

知慧「うん」

沙月「クソだよな」

里菜「え？」

沙月「顧問の松下。あいつ今年から先生になったんだよ」

里菜「うん」

沙月「なにイキッてるんだよ。下手くそ上手にするのが顧問の仕事

だろうが——あ、ごめん」

知慧「いいよ、下手くそだから、ほんとに」

注文したメニューを持って来る店主の井川讓吉（50）。

讓吉「はい、ミルクティー二つと、イチゴパフェ。沙月は昆布茶ね。

ごゆっくりどうぞ」

真紀の前に置かれるイチゴパフェ。

知慧「現物見ると実感するわ」

真紀「え？」

知慧「この状況でイチゴパフェを注文できるあなたのメンタルの凄

さを」

真紀「いいじゃんべつに、食べたかったんだから——」

笑う里菜と沙月。

里菜「桐林さん、陸上部は？」

沙月「——うん、これで、やめた」

鮮やかな赤い髪を撫で上げる沙月。

真紀「染めてるんだ」

沙月「ううん、地毛」

知慧「地毛なの、それ？」

沙月「うん、隔世遺伝ってやつ」

沙月、カウンター内で調理をしている讓吉の妻、祥子（43）を見る。彼女も赤毛。

沙月「祥子おばさん。わたしのひいおばあちゃんがアイルランドの人でね、その遺産だろうって」

真紀「あの、ここが家って？」

沙月「親が交通事故で死んじゃってさ。小三のときからここで暮らしてる」

真紀「——ごめんなさい」

知慧「ほんと、昔から要らないこと訊く天才だよね、あんたって」

真紀「だって」

沙月「いいいいよ、そんなの」

知慧「わたしき、桐林さんの髪、素敵だって、初めて見たときから思ってた」

沙月「ありがとう。けど、そんなこと思わないヤツもいてさ——」

●ヘインサート▽茜川高校グラウンド

トラックを走っている沙月。ゴールし、膝につき荒い呼吸をする。そこへやってくる顧問の青山（36）。

青山「期限は今日までだったよな桐林。なんで色抜いてこないんだ、

ああ」

答えない沙月。

沙月「地毛だよ……」

青山「ああ？」

沙月、顔を上げて。

沙月「だから地毛なんだよ！前から言ってるだろ！色抜くも抜かないもないんだよ！」

青山「嘘をつくんじゃない！おれの教師生活の中で、そんな地毛の生徒は見たことがない！」

沙月「アンタのチンケな人生物差しにしてんじゃねえよ！なんで生徒の言うこと信じられないんだよ！ていうか赤い髪じゃなくなったら、足速くなんのか！答えろ、筋肉バカ！」

青山「桐林、おまえっ！」

思わず手を振り上げる青山。にらみ合う二人。ゆっくり手を

降ろす青山。

沙月「わたしは、一生懸命走りたいたけです。髪の色は関係あるんですか、先生」

青山をじっと見る沙月。目をそらす青山。

(インサート終わり)

真紀「それで、やめたの?」

沙月「うん。体験入部期間で終了」

知慧「入ったはいいけどバカな教師が多くて困ったもんだ、うちの高校も」

沙月「まったく——(後ろを向き)ほら、季穂、あんたもこつちきなよ。みんな同級生だよ」

季穂、『キャプテン翼』を読んだまま。

季穂「いい。南葛と東邦の試合がいいところなんだ、今」

沙月、苦笑いして。

沙月「気にしないでね、あれが通常運転だから。高校入ってから」

真紀「高校入ってから?」

沙月「うん。サッカーでできなくなってやさぐれてるの。中学校までは男子といっしょのクラブチームに居れたんだけどね」

真紀「男の子に混じって?」

沙月「うん。エースストライカーだったんだ。運動神経抜群。他に何かやりやいいんじゃないかって思うんだけどさ」

●ヘインサート◇中学校のグラウンド

サッカーの試合中。男子に混じって試合に出ている季穂。巧みなドリブルで三人を抜き去り、強烈なゴールを決める。満面笑顔の季穂。

(インサート終わり)

季穂「人のことペラペラうるさい、沙月」

沙月「ね、やさぐれてるでしょ」

里菜「桐林さんも、だよね」

沙月「え?」

里菜「足、すごく早かったんでしょ」

沙月「——まあ、ね」

知慧「やさぐれかあ——なんかわたしもそんな気分だなあ。今日イチゴパフェ平気で食べられる女の横にいと余計になあ」

真紀、スプーンを持つ手が止まる。

真紀「いいじゃんか、おいしいんだもん」

真紀の携帯電話が鳴る。YUIの『CHE.R.RY』のメロディ。

ハツとなる真紀。バツが悪そうに。

知慧「鳴ってますけど、携帯」

真紀「——うん」

知慧「和樹くん限定着メロの『CHE.R.RY』が鳴ってますけど」

真紀「……」

知慧「出ないの？ 切れちゃうよ」

真紀「もうっ、うるさいなあ！」

立ち上がる真紀。いったん店を出る。

沙月「え、彼氏いるのあの子？」

知慧「うん、ナマイキにも。中三のときからつきあってる」

沙月「へーえ。でもなんかいい感じだよね、あの子。見てて楽しいわ」

里菜「うん、だよね」

知慧「は、真紀のどこが？」

里菜「それは、ずっと一番近くにいた海藤さんが誰より分かっているんじゃない？」

知慧「だから幼稚園からの腐れ縁だつてば」

ミルクティーを飲む知慧を笑って見ている里菜と沙月。

#### ○前同・店先

携帯電話で話している真紀。

真紀「うん、うん、ごめん。今ちよつとゆっくり話できないの。家帰ってご飯食べたら、電話するから——」

○浄仙寺・門

門をくぐって中に入る知慧。

○浄仙寺内(海藤家・キッチン兼居間(夜))

テーブル前の椅子に座り、カップ麺を食べながら缶チューハイを飲み、テレビのバラエティー番組を視ている知慧の兄、

賢倫(19)。

風呂から上がったパジャマ姿の知慧がやってくる。

知慧「毎日食べてるよね、その豚キムチってやつ」

賢倫「あ？ おお、最近ハマっちゃってさあ。食べたんだったらあるぞ」

知慧「食べるわけじゃないでしょ」

冷蔵庫を開け、オレンジジュースを取り出す知慧。

賢倫「なあ知慧、相談なんだけどさ。この寺、おまえが継いでくれない？」

知慧「はあ？」

賢倫「だってさ、おまえ何が楽しいのか知らないけど、じいちゃんや親父といっしょに毎朝のお勤めとかやってるじゃん。やつぱやる気のある人間が継ぐべきだよ。養子もらってさ。いや、俺たちさ、メジャーデビュー目指すって決めたんだよ」

知慧「お坊さんの息子ばっかで組んだバンドで？」

賢倫「ああ。いけると思うんだよマジで」

テーブルの上に置いた賢倫の携帯電話が鳴る。受ける賢倫。

賢倫「はい。どした。あつ！ 決まったか、よっしゃ！ よくやった！ 出す出す、車出す！ 向こうも四人だな！ もう一台はおまえな！ どこ行こう！ 海——は早いか。でも女の子喜ぶよー、海見るだけでも。ばっかやろー、話が早いよ。こういうことは順序立てていかないとけないのっ！」

コップに注いだオレンジジュースを一气飲みし、グラスをテ

ーブルに叩きつけるようにして置く知慧。

知慧「洗っというて」

部屋を出ていく知慧。

賢倫「がつつかないの！ 嫌われちゃうよー、なあ、なあ、海行つたあとどこ行こ。——いや、そりやおまえ展開次第でさあ、わははは。なあ、なあ。わはははは！」

喧しく通話を続ける賢倫。

○【悠連会館】会場入り口（夜）

喪服姿の参列者が出入りしている。

その横の通路に入っていく里菜。裏口から家へ入っていく。

○早田家・里菜の姉、真耶の部屋の前（夜）

廊下に座り壁に背をもたせかけ、部屋の扉に向かって話をしている里菜。

里菜「——でね、わたしと織田さんと海藤さんの三人がソフト部クビになっちゃったの。頑張れるかなって思ってたんだけどさ。でも、かわいくていい雰囲気だったよ、桐林さんのお家の喫茶店。すごく落ち着く感じ。お姉ちゃん絶対好きだと思っ」

中から返事はない。

里菜の母の声「里菜ー。着替えてちょっと手伝ってくれるー」

里菜「分かった、今行く」

立ち上がる里菜。

里菜「アドラールっていうお店。いつかお姉ちゃんといっしょに行ってみたいな」

里菜、立ち去る。部屋からの反応はない。

○【アドラール】店内（夜）

営業中の店。昼とは変わりパブ営業の店。ボサノヴァが流れる落ち着いた雰囲気の中の、カウンター席に座っている沙

月と妹の優花（9）。優花は算数のドリル帳を広げ宿題をしている。その隣でピラフを食べている沙月。

沙月「変わった子だよねえ、あんたも」

優花「え？」

顔を上げ沙月を見る優花。

沙月「よくこんな場所で算数の計算ができるわ、ほんと」

優花「ここじゃないと、頭に入ってこないの」

沙月「ふーん」

優花の黒髪を撫であげる沙月。

優花「なにい、お姉ちゃん」

沙月「あんたはお母さん譲りの黒い髪でよかったねえ。無駄な苦労しなくてすむよ」

優花「陸上部、ほんとにやめちゃったの、お姉ちゃん」

沙月「うん。やめちゃった」

優花「走ってるお姉ちゃん、好きだったんだけどな。わたし、足遅いから」

ドリル帳に戻る優花。優花の髪を優しく撫であげ続ける沙月。

○龍野家・ダイニングキッチン（夜）

食卓を囲んでいる一家。父、研造（44）母、静海（43）、弟、真斗（9）。

季穂、不機嫌な顔で食事している。テレビにはプロ野球へジヤイアンツ対スワローズ戦が映し出されている。食事もおぼつかなく、ナイターを見ている研造と真斗。スワローズのピッチャーがジヤイアンツのバッターを三振に打ち取る。

研造・真斗「よっしゃっ！」

ハイタツチをする父と子。ため息をつく季穂。

季穂「ああ、うざい……」

研造「うざいとかいうなよお、なあ」

真斗「姉ちゃん最近うざいばっか言ってる」

研造「黙ってな、うざいんだよ」

真斗「また言った」

苦笑して季穂を見ている研造と静海。

研造「他のスポーツやる気はないのか、季穂」

季穂「——ない」

研造「サッカーできる学校に通わせてやれたらよかつただけだな」

季穂「それ、もういいって。ごちそうさま」

立ち上がる季穂。

研造「なあ、いつかい俺らの野球観にこんか」

季穂「はあ？」

研造「対戦相手のレッドキャッツっていうチームにおまえらの同級

生がいるんだよ。ピッチャーで杉崎寿音ちゃん。知らない？」

季穂「顔は、見たことある」

研造「そうか。その寿音ちゃんがな、すごい球投げるんだよ。女の

子の投げる球とは思えん。すごいよあの球は。今度アドラブル

行ったらマスターに訊いてみ。同じこと言うと思うよ」

季穂「それが？」

研造「いや、『それが』って——」

季穂「野球とか興味ないし」

部屋を出ていく季穂。

静海「意図は？」

研造「ん？」

静海「だから今の」

研造「いや、あいつ負けず嫌いだろ、だから」

静海「ふーん」

研造「これからずっとあのブスツとした顔で生きていかせるわけに

もいかなだろうよ——あ、やったっ！」

ヤクルトの選手がホームランを打つ。またハイタッチをする

研造と真斗。苦笑してそれを見ている静海。

○織田家・真紀の部屋（夜）

机の前の椅子に坐り、携帯電話で話をしている真紀。

真紀「いや、そりゃさあ、今までより時間あるんだけどさあ、なんかこのまま終わっちゃっていいのかっていう気も——え、他の部？ それはちよつと今のところ考えてないんだけど、帰宅部っていうのもなんかさあ——うん、毎日いっしょに帰れるけどさあ——そりゃ、うれしいよ、うん。すごくうれしいんだけどさ——」  
楽しそうに話しを続ける真紀。

○【アドラーブル】店内（日替わり）

いつもの席で『キャプテン翼』を読んでいる季穂。エプロン姿の沙月がカウンター席に座りボーっとしている。

沙月「ヒマだねえ」

季穂「まあね」

沙月「これからずつとヒマなのかねえ、うちら」

季穂「ま、そうじゃない」

カウンターの内側で競馬新聞を読んでいた讓吉。

讓吉「あんまりヒマヒマ言うなよ沙月。経営者としていたく傷つく」

沙月「だってヒマなんだもん。競馬ばっかやって、営業努力が足りないんじゃない」

讓吉「さーせん……」

入口のベルが鳴り、入ってきたのは知慧。

讓吉「いらっしやい——ああ」

会釈をする知慧。沙月と季穂を見て。

知慧「こんにちは」

沙月「いらっしやい。どうぞ」

カウンター席に座る知慧。

沙月「もしかしてこの店気に入ったとか？」

知慧「え、うん。かわいらしくって、いっぺんで好きになっちゃった」

沙月「だって、譲ちゃん」

譲吉「うれしいねえ。ありがたいねえ」

知慧「あの、愛くるしいって意味ですよ、アドラブルって」

譲吉「お、よく知ってるね」

沙月「新入生代表で入学式に挨拶するくらいだよ海藤さんは。それくらい知ってるよ」

譲吉「へーえ。頭いいんだねえ。でもその意味だけじゃないんだよ  
ね」

知慧「え？」

譲吉「アドラブルって名前の馬がいたの。その馬にね、生涯初の  
GI馬券取らせてもらったの。だからこの店の名前にしたんだ」

知慧「へえ」

沙月「——ほんと、毎週負けっぱなしでよく飽きないわ」

譲吉「負けっぱなしじゃない！ ファイトガリバーの桜花賞だって、

マツリダゴツホの有馬記念だって取ってるの！」

沙月「出たマツリダゴツホ。もう耳にタコだよ——ごめんね海藤さ  
ん。ミルクティー？」

知慧「えーっと、今日は——イチゴパフェを」

沙月、知慧をまじまじと見て笑う。

沙月「羨ましかったんだ、ほんととは」

知慧「はは。まあ、そういうところ」

季穂「フルーツパフェの方がいいよ、ここは」

知慧「え？」

知慧、季穂を見る。季穂コミックから顔を上げ知慧を見て。

季穂「通称バカ盛り。イチゴパフェと五十円しか変わらない」

微笑む季穂。

知慧「そうなんだ。じゃあそのバカ盛り」

沙月「あいよ。大将バカ盛り一丁！」

譲吉「うちは食堂じゃないの！ それにそのバカ盛りっていうのや  
めなさい！」

笑う三人。

× × ×

知慧の前にふんだんに果物が乗ったパフェを置く沙月。

沙月「はい」

知慧「ほんとにバカ盛りだ……」

季穂「ね」

知慧「うん。いただきます——おいしい」

微笑んで知慧を見ている沙月と季穂。

沙月「今日相棒は？」

知慧「え？ ああ真紀。あれはダーリンといっしょにご帰宅なさってます」

沙月「ああ、彼氏いたんだったね」

知慧「うん」

沙月「淋しかったり？」

知慧「それはないよお。言ったじゃん、ただの腐れ縁だって」

沙月「えー、ほんとかなあ」

知慧「ほんとだよ——でもまあ、退屈にはなったかも。あの子といっしょにいると飽きないからさ」

沙月「飽きない？」

知慧「うん。なんにもないところでよく転ぶような子だからさ」

季穂「なんにもないところ？」

知慧「そう。よく地面にべちゃってなってる」

笑う三人。

季穂「海藤さんはなんでソフト部入ったの？」

知慧「え？」

季穂「あんまりスポーツするようなイメージないからさ」

沙月「うん。わたしもそれ思ってた」

知慧「——変、かな」

沙月「いや、別に変ってことはないけど」

季穂「ごめんごめん、答えたくなかったらべつにいいよ」

知慧「——好きな子がいたの」

沙月「え」

知慧「小学生の頃からずっと好きだった子。その子が中学になって

野球部に入ったの。だから」

季穂「ああ、グラウンド共有だもんね」

沙月「近くで見られてるもんね」

はにかみうつむく知慧。

知慧「だから、動機は不純。ずっと補欠だった——なんか、いろいろ恥ずい」

沙月「意外だなあ。でも、すごくいい」

知慧「え」

沙月「いいと思うよ、そういうの。ねえ季穂」

季穂「うん。いいよ。で、高校入ってもソフト続けようって?」

知慧「真紀——あの子もソフト部で補欠だったんだけどさ、いっしょに入ろうって。わたしもソフトやるの、好きになってたし。だから」

沙月「そっか。でさ、その彼とは」

知慧「え、ああ。その子中二のとき彼女できて、高校は別々。なんにもなし」

沙月「くーっ、切ないねえ」

知慧「そう、切ないのよ。わたし」

笑う三人。

カウンターの内で椅子に坐り競馬新聞を読んでいた讓吉。

讓吉「いやあ、こういうお話を生で聴けるからこの商売やめられんのだよなあ」

三人、競馬新聞に目をやったままの讓吉を見る。

沙月「なに盗み聞きしてるのよスケベ親父」

讓吉「聞こえちゃったんだからしょうがないじゃないの。ねえ、海

藤さん」

知慧、讓吉を見て笑って。

知慧「バカ盛り、すごくおいしいです」

讓吉「だからバカ盛りって呼んじゃいけないのっ！」

声をあげて笑う三人。

季穂「ねえ、おじさん」

讓吉「ん？」

季穂「お父さんから聞いたんだけど、うちの同級生の杉崎さんって野球やってるの？」

讓吉「ああ。すごいよ彼女。とんでもない球投げる。球種はストレートとドロップ——縦のカーブだけなんだけどね。この前の試合ノーヒットノーランくらっちゃった」

季穂「なんで朝霞学園行かなかったんだろ。あそこ女子の野球部あるのに」

讓吉「それは知らない」

季穂「ほんとにそんなに凄い？ 杉崎さんの投げるボールって」

讓吉「ああ、すごいよ。ストレートはホップしてくる。ドロップボールの落差はえげつない」

季穂「——次の試合っていつ？」

讓吉「え？」

季穂「だから杉崎さんのいるチームとおじさんたちのチームが試合するのって、次いつ？」

讓吉を見る季穂のまっすぐな瞳。その季穂をじっと見る沙月と知慧。

○河川敷のグラウンド（日替わり）

日曜日の早朝。草野球の試合前。二十代から五十代の男たちがキャッチボールをしたり、ノックの練習をしている。その様子をグラウンドの端で並んで見ている、真紀、知慧、里菜、沙月、季穂の五人。

真紀、うつむき頭をガクガクとさせる。  
それを見て真紀の頭を軽くはたく知慧。

真紀「あたっ」

知慧「立ったまま寝るな」

真紀「叩かないでよお——だいたいなんなのよ、日曜日なのにさあ……」

沙月、キャッチボールをしている寿音に目をやり。

沙月「三組の杉崎さん」

季穂「——うん」

寿音を見る季穂。

× × ×

草野球チーム、レッドキャッツとフレッシュボイスの試合。

レッドキャッツのマウンドに立つ寿音。一回を三者三振に打ち取る。その剛腕に驚く五人。

里菜「すごい……」

沙月「女の子の投げる球じゃないよね」

マウンドを降りる寿音を見つめる季穂。

× × ×

打席に立っている寿音。バット一閃。鋭い打球が左中間を抜けていく。全力疾走で二塁に到達する寿音。

× × ×

最終回七回の裏、ツアアウト。マウンドに立っている寿音。試合を見ていた季穂、レッドキャッツの監督のところへ。

季穂「あの」

監督「ん、なに、お嬢ちゃん」

季穂「代打、お願いします」

監督「え？」

季穂「代打、わたしにお願いします」

頭を下げる季穂。その様を微笑んで見ている研造と讓吉。

× × ×

三回素振りを繰り返し、バッターボックスに入る季穂。構えを取り、鋭い眼光でマウンド上の寿音を睨みつける。

その様をじっと見ている四人。

真紀「すごい、決まってる」

知慧「あんたなんかよりずっとね」

真紀「自分だって……」

里菜「龍野さん、ソフトボールや野球の経験は？」

沙月「体育の授業でやったくらいじゃない。なんせ運動センスの塊だからあの子」

寿音、振りかぶって第一球。ストレート。季穂。豪快に空振り。

第二球。ストレート。またも空振り。悔しがる季穂。

第三球。ストレート。ファウルチップがバックネットへ。小さななどよめきがおきる。

第四球。ストレート。芯でとらえる季穂。鋭い打球が三塁線ギリギリに飛ぶ。ファウル。大きなどよめき上がる。

返球を受け取り、じっと季穂を見る寿音。その目を逸らさない季穂。

第五球。縦に大きく割れるドロップ。季穂、大きく体勢を崩して空振り。ゲームが終わる。

× × ×

整列し挨拶を終えた寿音が、五人のところへやってきて、季穂の前に立つ。

寿音「あの……」

季穂「やられた」

寿音「最後までストレート投げたかったんだけど、あのファウル見てさ——ソフト、やってたんだ」

季穂「え、ううん。体育の授業でちょこっとやったくらい」

寿音「それであの打球……すごい」

沙月「噂通りのすごいピッチャーだったね杉崎さんは」

季穂「うん」

寿音、五人を見渡す。

寿音「あの」

沙月「うん。こっち三人はソフト部クビチーム。で、うちら二人は

——まあ、似たようなもんか」

季穂「なんで朝霞学園行かなかったの」

寿音「え？」

季穂「だってほら、あそこ女子の野球部あるじゃん。全国大会とか出てたりする」

首を横に振る寿音。

寿音「ま、家庭の事情ってやつ。ほら、あそこ、学費高いから」

季穂「——そっか。わたしといっしょだ」

寿音「え」

季穂「わたしもホントは女子のサッカー部がある学校に行きたかった

ただけどき——でも、なんかもったいないね」

寿音「でも今日は、対戦できて楽しかった」

季穂「わたしもだよ。最後変化球投げてくるとは思わなかったけど」

寿音「だって打たれるのマジでいやだったから」

季穂「マジでいやだったんだ」

寿音「うん」

笑う二人。

寿音「あの、これからいっしょに草野球やらない？ まわりおじさんたちばかりだけどき」

季穂「え」

寿音「女子わたしひとりで淋しかったんだ。ね、ここでいっしょにやろうよ」

季穂「わたしは、べつにいいけど。沙月は？」

沙月「うーん、野球かあ。やったことないしなあ」

季穂「いつまでもヒマなものやじゃない？」

沙月「まあ、たしかに。そっちの三人は？」

真紀「いやあ、わたしたちは。ソフト部クビになっただけだし、ねえ」

知慧を見る真紀。

知慧「わたし、やる」

きっぱり言い切る知慧に驚く真紀。

真紀「ちよつと知慧」

里菜「わたしもやる。下手でいいんだったら、やりたい」

真紀「早田さんまで……」

知慧「なんか——なんかさ、胸が熱くなった。二人が対戦してるの

見て。だから、わたしも野球やりたい」

里菜「うん。わたしもそうだよ」

知慧、真紀を見て。

知慧「あんたは彼氏とのデートで忙しいか。じゃ、ムリだね」

真紀「そんなこと言わないでよお……」

知慧「ソフト部クビのレッテル貼ったまま帰宅部続けてればいいよ、

あんたは」

真紀「もう——分かった。やる。やるよわたしも。わたしだってこ

のまま帰宅部なんて、いやなんだからね……」

寿音「やった。じゃあ来週も日曜日。朝七時から試合があるの。そ

のときゲームに混ぜてもらえるよう監督に言ってみるね」

真紀「日曜日の七時から!？」

知慧「驚くような時間じゃないでしょうが! 和樹くんと電話や

メール早めに切り上げて早く寝ろ! そしたら起きられる!」

真紀「すぐ怒る……」

二人のやり取りを見て笑う四人。

○河川敷のグラウンド（日替わり）

レッドキャッツとフレッシュボイスの試合風景。寿音と真紀  
がレッドキャッツ。季穂、沙月、知慧、里菜がフレッシュボ  
イスにいる。

× × ×

マウンド上の寿音、バッターボックスの季穂。投げる寿音。季

穂、バット一閃。鋭い打球が三遊間を抜けていく。一塁ベース上で親指を立てて寿音に向かって笑う季穂。寿音も笑う。

× × ×

セカンドを守っている知慧。トンネルエラー。内外野、ベンチから「ドンマイ!」の声があがる。

× × ×

三塁を守っている沙月に強烈なゴロが飛ぶ。横っ飛びの沙月。取れない。抜かれたと思った打球を、ショートの季穂がカバー。捕球。

季穂「知慧!」

セカンドベースに入る知慧に送球する季穂。知慧、ベースを踏み捕球。ワンアウト。

知慧「里菜!」

ファーストの里菜に送球する知慧。そのボールをしっかりと受け止める里菜。

ダブルプレーが成立する。

飛び上がって喜ぶ知慧と里菜。

× × ×

マウンド上の寿音。キャッチャーは真紀。渾身のストレートを投げる寿音。

真紀「ひっ!」

眼をつむる真紀。ボールがマスクを直撃。後ろにそっくり返る真紀。

その様子をバックネット裏から立ってみている権藤凜子(28)。薄く笑って立ち去る。

○茜川高校・グラウンド(日替わり)

体育の授業中。体操服を着てグラウンドを周回している一年四組の女子生徒たち。その中、隣りどうしで走っている真紀と知慧。

知慧「キャッチャーがピッチャーの球に目をつむってどうすんのよ」  
真紀「だって、ほんとに速いんだもん、寿音のボール。軟式なんて受けるの初めてだったし。でも最後の方はちゃんと受けられるようになったんだからちよつとは褒めてくれたっていいじゃん」

知慧「キャッチャーがピッチャーの球捕球できるのなんて当然でしょうが。だいたいおじさんたちが盗塁なしのルールにしてくれな  
きや、走りまわられて終わりだったんだからね」

真紀「言わないでよそれ——でも、なんか楽しかったね」

知慧「——うん」

真紀「次の日曜も楽しみ」

知慧「だったら次は遅刻するな」

真紀「……はい。あっ！」

転ぶ真紀。後続の生徒たちが慌ててよける。地面に突っ伏している真紀。

真紀「うぐぐ……」

知慧「ほんと、見てて飽きんわあんたって」

真紀を見下ろし苦笑を浮かべる知慧。

○前同・一年四組教室

窓際の席に座っている城内美青。原稿用紙に向かって執筆している。机の上にはスポーツ誌の『ナンバー』が開かれて置かれていて、それを読み返しながら執筆をつづける美青。顔を上げて窓の外、グラウンドを周回するクラスメイトたちを見る美青。また執筆に戻る。

○前同・一年四組前の廊下。

昼休みを告げるチャイムが鳴る。教室から出てくる生徒たち。トイレへ行こうとする美青を現代文の若本珠代（28）が呼び止める。

珠代「城内さん」

振り返る美青。

美青「はい」

延本「体育の授業で出した山際淳司さんの『江夏の21球』考察したレポート、生沢先生から読ませてもらったわ」

美青「ありがとうございます」

珠代「高一であそこまで書けないわ。わたし野球詳しくないけど、とても伝わってきた。今はなに書いているの？」

美青「桑田、清原がいた頃のPL学園について調べて書いてるんです」

珠代「へえ。野球好きなんだね城内さんは」

美青「はい、大好きです」

珠代「そう。そうやって頭を使って野球のこと調べて一生懸命書くのも十分体育よ。城内さん、書き続けて。あなたには文筆の才がある」

美青「はい」

珠代「何より原稿用紙に手書きするのがいいわ。これからもあなたの文章読ませて。わたし楽しみに待ってる」

美青「はい」

その様子を少し離れた場所から見ている知慧。

○前同・図書室

昼休みの閑散とした図書室。大机の前に座って読書をしている美青。

美青に声をかける知慧。

知慧「城内さん」

美青「ああ、海藤さん」

知慧「となり、いいかな」

美青「うん、どうぞ」

美青の隣の席に座る知慧。

美青「織田さんは？」

知慧「え？」

美青「ほら、なんかいつもいっしょにいてる印象あるから」

知慧「ん？ あの女は学生食堂にてダーリンと食事の後のおしゃべり中でしょうかね」

美青「ああ、彼氏いるんだったね」

知慧「ナマイキにも——でも真紀とニコイチと思われてるのか。よくない傾向だな、それは」

美青「ははっ。別にいいじゃん。なんかいいよね織田さん。海藤さんがいっしょにいたくなるの分かる。ほんわかしてて、誰にも分け隔てない。見てるだけで和む」

知慧「——最近なんか評価高いんだよなあ、あの女。納得いかん」  
笑う美青。

知慧「あの、さつき若本先生と話ししてるの聞いちゃったんだけどさ。野球好きなんだね、城内さん」

美青「うん」

知慧「好きなプロ野球のチームとかあるの？」

美青「うん、どっかっていうのは特にない。野球観るのが好きなの。

去年は東京ドームに二回、神宮に三回観に行ったんだ」

知慧「へえ」

美青「スコアブックもつけられるんだよ」

知慧「すごい」

美青「看護師さんから教えてもらったんだ」

知慧「看護師さん？」

美青「うん。わたしね、小学校のときほとんど病院で過ごしたの。

そこに野球がすごく好きな男の看護師さんがいてさ。その人の影響で野球が好きになったの」

知慧「へえ」

美青「元高校球児だね。ナックルボールの投げ方も教えてもらった」

知慧「ナックルボール？」

美青「うん。ゆらゆら揺れて、投げた本人もどこに行くか分からない

球」

五指を折り曲げたナックルボールの握りを知慧に見せる美青。

美青「俺は草野球界いちばんのナックルボーラーだ」なんて言つてた。体調がいいときは、病院の中庭でキャッチボールしたり――

ねえ、海藤さん」

知慧「ん？」

美青「ソフト部退部させられたって本当？」

知慧「あちゃー。城内さんも知ってるかあ。お恥ずかしい」

美青「――ひどいよね」

知慧「え？」

美青「そんなのってひどすぎる。わたし、そんなの絶対許せない」

怒りの顔の美青をじっと見つめる知慧。

知慧「でもいいの。この前から野球やってるから。おじさんたちと  
いっしょだけだ」

美青「え、野球？」

知慧「うん。草野球のチームに混ぜてもらってる。ソフト部クビになつた真紀と早田さんも。あと五組の龍野さんと七組の桐林さん  
もいっしょ。レッドキャッツっていうチームにね、三組の杉崎さん  
がいるんだ。すごい速い球投げるの。次の日曜もみんなで参加  
するんだ。エラーしても怒られないしさ。やってて楽しい」

知慧をじっと見る美青。ハツとなる知慧。

知慧「――あの、ごめん」

首を横にふる美青。

美青「わたしも、行っていいかな」

知慧「え」

美青「みんなが野球してるところ、わたし、見てみたい」

見つめあう二人。うなづく知慧。

○河川敷のグラウンド(日替わり)

レッドキャッツとフレッシュユボイスの試合。レッドキャッツ

のバッテリーは寿音と真紀。

ベンチに座ってスコアをつけながら試合を見ている美青。その隣に座っている知慧。隣に里菜、沙月、季穂も。

知慧「すごいね、本当につけられるんだスコアブック」

美青「うん。スコアつけてるとね、自分がグラウンドに出てプレーしてるみたいな気持ちになるんだ——ねえ」

知慧「もしかして盗塁なしのルールなの？」

美青「うん。あの子がさ、とにかくダメなの二塁にボール投げるの」

真紀をコナす知慧。

美青「織田さんが」

知慧「うん。中学の頃からそう。キャッチングはヘタじゃないんだけどね、二塁や三塁に投げるのがとにかくダメ。ボールどこ行くか分かんない」

沙月「一回見せてもらったけどあれは酷い」

季穂「うん。織田真紀ルールがなかったら走られまくって試合にならないよ」

笑う四人。

美青「そっかあ。でもやっぱりつまらないなあ、盗塁できない野球なんて」

寿音がバッテリーを三振に切って取る。ガッツポーズをして立ち上がる真紀。フレッシュボイスのベンチを指さし、どうだと言わんばかりの顔でベンチへ向かう。

知慧「なんだあの女。野球つまらなくさせてるくせに。分かってんのか。杉崎さんの球捕ってるだけのくせして。悔しかったらまとも二塁に投げてみる。調子こいてんじゃないよ」

里菜「毒舌がすごい」

知慧「足りないくらいだよ」

ベンチから立ち上がる五人。

×

×

×

試合が終わる。五人のところへやってくる真紀と寿音。

真紀「勝っちゃった〜」

知慧「うるさいっつもの。あんたなんか織田真紀ルールがなかったら走られまくって終わりなんだからね。分かってんのか」

真紀「でも勝ちも勝ちだも〜ん。三三振の人は黙っててくださ〜い」

知慧「マジでむかつく、この女……」

美青「杉崎さん」

寿音に声をかける美青。

寿音「はい」

美青「すごい速い球投げるね。びっくりした」

寿音「ありがとう」

美青「野球はいつから?」

寿音「小五からレッドキャッツにいるの。お父さんもいたから」

真紀「小五。はやっ」

真紀をちらっと見る美青。

美青「投げ方、お父さんに教えてもらったの?」

寿音「うん。社会人野球のピッチャーだったの。今はちょっといっ

しよに暮してないんだけどさ」

真紀「へえ。そうだったんだね」

美青、真紀を見て。

美青「織田さん」

真紀「ん?」

美青「知らなかったの、そのこと?」

真紀「え、そのことって?」

美青「だから、杉崎さんのこと」

真紀「うん。それが?」

美青「ダメだよ。知ってなきや。織田さんは杉崎さんの女房役なんだから」

美青、微笑んで真紀を見て。

真紀「え——」

美青「偉そうに言って、ごめんね」

真紀「ううん——」

知慧「もっと言っているよ城内さん」

真紀「うるさいよ……」

美青、また寿音を見て。

美青「縦のカーブもキレがあるね。でももうひとつ変化球覚えても

面白いかも。チェンジアップとか。もっと速球が生きると思う」

寿音「うん——詳しいんだね、野球」

美青「ほんと、偉そうに言ってごめんね」

沙月「偉そうに言っているよ、城内さん」

美青「え」

季穂「うん、わたしもそう思う。すごい」

里菜も頷く。

美青「じゃあ——織田さんはやっぱり二塁にちゃんと投げられるよ

うにならないとね」

真紀「……」

美青「盗塁なしのルールなんて、やっぱりおかしいもん。練習すべ

きだよ」

真紀「……うん」

クッククックと笑う知慧。

知慧「ざまあ」

美青「海藤さんも協力してあげてね」

知慧「え？」

美青「送球練習には投げたボール捕るセカンドがいるでしょ」

知慧「——うん」

真紀「ちゃんと協力してよね」

知慧「ハあー？　なんだこのバカ！」

真紀「バカってなによひどくないー？」

里菜「もう、甘噛みのケンカはそのくらいにしときなよ。ねえ、キ

ヤツチボールして終わろうよ」

沙月「うん——城内さんもやる？」

美青「え？」

沙月「ちよっとだけでも運動だめなの？」

美青「ううん。今日は体調もいいし。すこしだけだったら」

沙月「だったらやろうよ」

美青「——うん。やりたい」

季穂「わたしグローブ借りてくるわ」

フレッシュボイスのメンバーのもとへグローブを借りに行く

季穂。

× × ×

グラウンドに広がり、キャッチボールを始める七人。

美青、知慧からのボールをキャッチし、真紀に投げる。しつ

かりと真紀の胸もとまでノーバウンドでボールは届く。

ボールは真紀、寿音、里菜、沙月、季穂、知慧と繋がり、再

び美青へ。キャッチする美青。

知慧「しろう……美青！」

美青の名前を呼ぶ知慧。知慧を見る美青。

知慧「あのボール、投げてみせてよ！」

ナックルボールの握りをする知慧。じっと知慧を見ていた美

青、頷く。

知慧「真紀、座って！」

真紀「ええ！？」

知慧「美青がナックルボール投げるから座れって言うてんの！ね

え、みんな美青のところに集まって！」

美青のもとへ駆け寄る五人。

真紀「なんなのよいったい……」

座る真紀。セットポジションをとる美青。彼女を見つめる五

人。美青の手から放たれるナックルボール。白球は揺れる不

規則な軌道を描いて。

真紀「ええっ！？」

最後まで揺れ続けるボールを真紀は取ることができない。

真紀「なに、今のボール……」

驚き、声を失っている五人に向き直り弾けるような笑顔を見せる美青。

(第一話了・続)